2023年度 入学試験問題

2月3日 第3回

国 語(45分)

注 意 ____

- 1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
- 2. 問題は2から11ページまでです。
- 3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
- 4. 机の上にあるQRコードのシール (どれでも良い) を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
- 5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- 6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつを おいてください。
- 7. 句読点・記号も字数に数えます。
- 8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

つづけ字ではなく、 1 のカタカナの部分を漢字に直しなさい。 11~15の読み方をひらがなで答えなさい。 点 画をていねいに書くこと。

2 1 司会をツトめる 本をシュ ッパンする。

3 ショウグン徳川家康。

4 キンゾクを加工する。

5 弓で矢をイる。

6 主君にチュウセイを誓う。

7 夕日が空を赤くソめる。

8 ふるさとのシンゼン大使になる。

米の品評会を行う。 中央カンチョウの役人。

その問題は易しい。

うそをついて墓穴を掘る。 養蚕の盛んな地域

土砂崩れが起こった。

次の文章を読み、 0 問 い に答えなさ

年の朋子のパイプオルガン作りを手伝っていた。 ダー)の芦原幹・朋子父子に出会う。陽菜は芦原幹に頼まれ、 た。フルートの練習中に、パイプオルガン制作者(=オルガンビル 音大受験に失敗した名波陽菜は、 姉の亜季が住む奥瀬見に来てい 同い

> 子 意を決したように言った。

「オルガンを作り終えたらフルートに戻るって、陽菜、 「やめるなんて言ってないよ。 ちょっと、迷ってるだけ」 言ってた。

あれは嘘だったの?」

オルガン、まだ作り終えてないじゃん」

「ごまかさないでよ。 陽菜、オルガンビルダーになるつもり?」

返事ができない私を、朋子は黙って見つめてくる。上空を吹く風

が、ごうっとひときわ派手な音を立てた

「さっき吹いてた曲、 あれ、 コンクールでやった曲だよね

聴いてたの? ていうか、よく覚えてるね」

「あのコンクールは、 華やかな舞台に立ってて、鎬を削ってる(=激しく争っていいコンクールは、衝撃的だったから。私と同じ年くらいの人た

る)。オルガンビルダーには同世代の仲間とかいないから、すごく 羨 2

ましかった」

「入賞した三人のことは覚えてる? 私とは V べ ル 0 違う演奏だっ

しかったと思う。だから私は、 「私はフルート のことはよく判らない。 陽菜がなんでフルートをやめようと みんな同 じくら 素 晴 ら

してるのか判らない」

ーは、私と三人の狭間にあった確かな断ーみんな同じくらい、素晴らしくなんかタ ない

学は、 絶を、 聞 き分けら

いない。だから、そんなことが言えるんだ。

「陽菜は、フルートをやったほうがいい

Þ

Ď

な

V

ほ

らうが

1

「私は、オルガンが向いてると思ってる

亜季姉にも言えなかったことが、すっと出てきた。

な音がたくさんあって、 「私には、 個性がないんだよ。好きな演奏がたくさんあって、好き 自分の演奏はこれだってものがない ・んだ。

フルート奏者はそれじゃ許され

個性を

業のほうが向いてる。 ンの部品)たちを組み合わせていく作業だよね。 るにしても、 オルガンで見つけられたと思ってる。 作るに しても、 フルートよりオルガンのほうが向いてる」 強い個性を持ったストップ(=オルガ オ 私にはそういう作 ルガンは演奏す

「朋子と一緒に整音(=音色を整える作業)をしたのは、すごくや自分でも止められないほどに、言葉がヒートアップしていく。

たよ。オルガンを弾いたり作ったりする仕事こそが、私にとって…りがいがあった。私がやるべき仕事はこっちなんだって、そう思っ たり作ったりする仕事こそが、

「私は、 朋子の声は、 自分がオルガンに 困惑していた。 向 11 てるかなんて、 考えたことがな 11

ルガン作りしかなかった。だから、 「やろうとしてることが向いてるか向いてないか、普通 「自分に向いてるか向いてないかなんて、どうでもいい。 オルガンを作ってる」 は 私には 考えるで 才

ない。オルガンが何より 「父だって別に、 向 V てるからオルガンビルダー も好きだっただけだよ」 に なっ たわけじ B

しょ?」

朋子が足を止めた。

いている感じがする 一空を吹き荒れている風が、 、私を包み込んでく 'n V 地上にも降りてきている。 た奥瀬見の自然が わ ず かに きこの かれ 牙を剝

「陽菜は、本当は何に な なりたい 0 $\overset{\check{}_{2}}{-}$

「何に——

びたかったんじゃないの?」 かったんじゃないの? 「コンクールで一 位 を取 取りたか フルー ŀ 0 奏者として、 たんじゃない スポ 0 ? ットライトを浴 音大に行きた

「でもそれ は、 私には向いてないんだよ」

じゃあ芦原さんはなぜ、

オル

ガンビルダーを続けられてい

るんで

そんな話はしてない。ごまかさな いで」

ビルダーの道を歩んでいる。 |大人を驚嘆させるほどの技術を誇っている。||ルダーの道を歩んでいる。自分の技術を高め、 朋子は、 強い人だ。子供のころからぶれずに、 一貫してオルビ 十九 て周囲 バガン

私は朋子みたいに、生きられ

朋子はじっと、私を見つめている。

「フルート奏者になりたいよ。でも、それ は私に、 は、 無理なんだ」

3私には、 朋子の目の中には、落胆も怒りもない。パイプの る私には、私のフルートが、ないのだから。 凹凸を丁寧に

するような、冷静な色だけをたたえている。でも、これ 自分を晒すつもりで、私は朋子の視線を浴び続ける。 が私な Ō

をと、 背後に 人の気配を 感じた。

「芦原さん――」

いつからそこにいたのだろう。振り返ると、そこに、 芦原さんが

「こんなことになるとは、 思っていま せんでした」

立っていた。

ても、オルガン制作をフルートに活かしてもらえると思った。 いによい影響があるはずだったのに----」 ガンを作るためです。だからあなたを誘ったのです。 「今回のオルガンは、街ぐるみで作ろうと思っていました。 芦原さんは、⁴残念そうに言った。 僕にはない感性、そういうものを統合して、 あなたにとっ 新しい 。僕には オル

いい影響だったと思ってます」

す。心理的な負荷も高い。僕は還暦を迎えていますが、この仕そのほとんどが、志 半ばで潰れます。儲からないですし、重労で僕はオルガンビルダーになりたがる人をたくさん見てきまし はじめてから三十年以上、ずっと自分の無力さに打ち 向いていようがいまいが、大半は潰れる世界です」 0 めされ 重労働で 仕事を てい

すか

淡々とした言葉に、私は気圧される(=圧倒される)思いだった。)僕が、オルガンを作るために生まれてきたからです」

-と芦原さんは言った。

「もう工房」あなたは-(=仕事部 にこないほうが 11 1

「馘ということですか」

てあなたを、惑わせてしまっただけでした。すみませんでした」 「オルガンが陽菜さんにいい影響を与えているとは思えない。 却^かえ

決然とした口調だった。

A強い閉ざされていく。見つけたと思っていた、私の道が、

「私を呼んだのは、 朋子のためなんですか

自分の口から出た質問に、私は自分で驚 た。 5 自 分 0 中 に 眠む

ていた醜 いものが、喉の奥から現れてくる。

「〈Pour T〉(=「Tのために」というフランス語

やめろと脳が警告をしている。でも、 言葉が止まらない。

「いま作ってるオルガンの木板に、芦原さんはそう書いてますよ

りなのに、彼に全く干渉できていない。その事実に、私はかつてな芦原さんの表情は、一切変わらない。 a切り札を出しているつも〈Pour T〉……このTつて、朋子のことですよね」

いほど、心が冷えていく。

るみで作ってるんですか?」 も、手を抜かないと言っていました。 「芦原さんは完璧主義なんですよね。 どんなオルガンを作るときに なのにどうして今回は、 街ぐ

「何が言いたいんですか」

「朋子のためなんじゃないですか。 人をどう使うのか、オルガンに

1 必要なものをどうやって調達するのか、オルガンはどう作るのか― 朋子に自分の技術を伝えるために、 朋子にオルガン作りの人脈を残したい、そういう理由 人を大勢集めているんじゃな

もあるんじゃないですか

何を言ってるんですか、陽菜さん……」

「どうして私に、

暴走している。判っているのに、止められない。どうして私に、朋子と一緒に整音をさせたんです 私は、 地 地面を見

つめていた。朋子も芦原さんも、怖くて見られない。

に置いて、 「朋子と私を組ませたのは、 刺激を与える……そのために、私は芦原さんに雇われた。 朋子のためだった。 同 1 年の 私をそば

本当は、そうなんじゃないですか」

| 芦源さんは、ふっと息を吐く。| |「もしもそうだとしたら、それがどうしたんですか?」

芦原さんは、

道を進むだけでしょう。占生半可な覚悟で、自分の道を決めかな)ことは気にならないはずです。他人がどう思おうと、 「真剣にオルガンの仕事を目指しているなら、 自分の道を決めないほ そんな些末な 自分の $\widehat{\parallel}$

うがいい」 「そんなこと、言い切らないでください。 そんなこと……」

私は、〈学管〉(=「私」が挑んだコンクールの名称。「私」 は四

だった。)のステージ裏にいた。

ね

き潰していった。彼らの個性的で確信に満ちた笛の音が、 三人の見事な奏者がステージ上に現れ、 6<u>私の未来を片っ端から叩きらびやかな演奏をした。</u>

やっと見つけたと思った道を、 私はい ま 潰されている。 私を誘きる

ってくれた人に。

もう私の未来を、 潰さない

「……九百六十一

芦原さんが、 突然、 数字を呟っ V た。

何

かの温度ですか?

「なんですか? 銀の融点です」

ーものが溶ける温

ル 判りました。 ガンの道を目指すというの あなたの覚悟を確かめます。 なら、 1 ますぐフル もしあなたが本気でオ ートを持ってきて

ください。工房の窯で溶かして、パイプの材料にします」 「何を言ってるんですか。そんなこと――

るほど質のいい銀は、パイプの素材にうってつけだ。提供してくだ 「オルガンの仕事に、フルートは不要でしょう。フルートに使われ

虚仮威し(=見せかけのおどし)でないことが伝わってくる口調さい」。

だった。芦原さんはて値踏みするように、私を覗き込む。 (中略)

けられる。 そんなことはできない。そんなこと――考えるだけで胸が締めつ ―できない。

芦原さんの口調に、柔和なものが戻っていた。「馬鹿なことを考えるのは、やめてください」

とです」 「あなたは自分を見失っている。もう一度自分と向き合ってみるこ

ていた。朋子の顔は、怖くて見られない。 芦原さんは c 踵 を返して歩きだす。私は、その足元を見つめ続け これ以上、話をする気はないということのようだった。

っていき、やがて、 8. ふたりが遠ざかっていく。 激しく吹く風の中に消えていった。 異なる音程のふたつの 足音は遠くな

後の 休憩時間、 の二曲目、ピアニスト、ギィ・デルヴォーによるピアノ協奏曲終了 り合ったオルガン奏者の神宮寺の出演するコンサートに行く。前半 〈中略〉その後、陽菜は東京に帰った。しばらくして奥瀬見で知 神宮寺に楽屋に呼ばれた。

「失礼します」

中に入ると、タキシードに身を包んだ神宮寺さんがいた。

「やあ、中プロ(=二番目のプログラム)、どうだった?」 神宮寺さんの心境はよく判らなかった。落ち着いているようにも、

> を答えてしまわないように、私は頭の中で言葉を選んだ。 感情を押し殺しているようにも見える。迂闊な(=不注意な)こと

「遠慮しないでいい。思ったことを言えばいいよ」

「え、そうですか?」

「うん。僕はプロだ。忖度 (=相手の気持ちをおしはかること) は

いらない」

「では……その、圧倒されました。ギィ・デルヴォーって、

ピアニストだったんですね」

ストラ)を乱暴に振り回しているかと思ったら、すごく真摯(=ま「なんか、演奏家としての底が見えませんでした。オケ(=オーケ 「そりやすごいよ。ほかには?」

じめ)に音楽に立ち向かう場面もあって……一面的に解釈 できない

っていうか、感情がぐちゃぐちゃにかき乱されました」

「それだけ?」

あとは……」

9

番強く思っていたことは、どうしても口に出せなかった。でも、

けに、その気配を感じた。 神宮寺さんは気づいているのだろう。 執拗な (=しつこい) 問いか

「君はやっぱり判ってないな

「 え ?

「朋子ちゃんから、伝言を預かってるよ」

「朋子から?」

「正確に言うと、芦原さんから」

何を言われているのか、判らなかった。 朋子が芦原さんから伝言

〈大社さんの演奏を聴きなさい〉

大社さん?」

(聴けば、陽菜さんにも判るはずです)。 前半の途中に朋子ちゃん

がきて、伝えていったよ」

か? 「どういうことですか? 前半の途中に、 朋子が楽屋にきたんです

さんが誰、 「ああ、 誰か判ってる?」が何か、慌ててい 慌ゎ 元ててい たみたい だけど……そんなことより、 大社

ろうか。 私は首を横に振った。そんな人が、 乗って $\widehat{\parallel}$ 出 演して) V ただ

じいさんだよ $\frac{1}{11}$ 失礼なやつだなあ。 セカンド (=第1一) フルート O, 白ら I髪のお

「セカンド……」

フルートは首席(=トップ)の門戸さんが三曲とも吹きに演奏された曲の作曲家)はそれぞれ二人編成だった。 とラヴェルは残りのふたりで吹き分けていた。 ではフルートは三人の奏者で吹くが、 サン=サーンス(=後半に演奏される『オルガン付き』の作曲 フォーレとラヴェ フ ル フ ア $\widehat{\parallel}$ オ ĺ 前半 1 ・スト 家

白 「髪のおじいさんは、 フ オー レでセカンドを吹い 7 いく た。 彼が、

大社さんなのだろう。

「僕には、 芦原さんの言 1 た いことが 判るよ」

「どういうことですか」

りも三人も舞台に乗ってると思っているんだい」 まあ確かに目立つけど……でも君は、 「フルート吹く人って、オケを聴いてもソロ 何のために、 ば かり聴 フルートがふた いてるよね。

男性が楽屋へやってきた。「そろそろ準備をお願 なんでですかと聞こうとしたところで、 ステージマネージャー VI L ます」と言い、 \dot{o}

神宮寺さんは、ぐっと背伸びをした。まあ、いまの君なら判るよ。あの整発 あの整音をした君ならね

前 座 ては終わりだ。 ギィは上手く会場を温めてくれたみたい だ

> が確定して、12 「音楽なんて、所詮は遊びだよ。僕は楽しむ。君も楽しめ。寺さんには臆した(=しりごみした)ような様子が全くない。 演奏だった。楽屋のモニターでそれを聴いていたはずなのに、 会場を温めたどころの話ではない。 このあとの メインは おまけにな 今日の演奏会でのひとり勝ち ってしまうレ すべ 神宮 ルの

を忘れて」 神宮寺さん の言葉は本気なのか d 空元気なのか、 私には よく判ら

7

なかった。

満腹なときにどんなに美味しいものを運ばれても、食事を楽しめなしまい、後半が気の抜サヤヤた長大なアンコールになってしまうのだ。 とがある。 ように。 クラシックのコンサートに足を運んでいると、たまにこういうこ ホールには、 前半の出来がよすぎて観客も奏者も感情を使 まだギィの興奮の残響 が渦巻いてい い果たして

客席の照明が落ち、 奏者たちが入場してきた。 ١V

女性を挟み、フルートセクション(=部門)の左端に座る。第三)フルートを担当するようで、門戸さんとの間にもうひとりの 0) にいると、失礼ながらあまり冴えない印象だ。大社さんはサード(= 低い年配の奏者で、颯爽とした(=さわやかな)私は門戸さんのあとに続く、白髪の大社さんを見 指揮者が入ってくる。 フルートセクション(=部門) 同時に、 白髪の大社さんを見つめてい 舞台の奥、 後方席の最上段に 門戸さんの近く た。

神宮寺さんと目が合った。

寺さんが現れた。オルガンの前に立

よち、

拍手を浴び

神

次の瞬間、身を翻して、神宮寺さんは私に向かって、 いかけた。

ているようにも、 る神宮寺さんの表情は、 〈怪物〉 もう判らない。1立ちはだって、オルガンの前に座る。 と遊ぼうとしているようにも見えた。 立ちはだかる壁に向 背を向 か

浴びたプレイヤーたちは、リハーサルよりも澄んだ音を奏でている。なごり)が漂っているのを感じた。ギィの演奏を三十分にわたって弦楽器の静謐な合奏が響く。私は弦楽合奏の中に、ギィの残滓(=ザルボッき せいりつ

複数人で吹くことで音の幅が生まれ、分厚いフルートは三本で同じ旋律を吹いている。 のところ、 よく判らない。 芦原さんがなぜ大社さん の音を聴けと言ってい 分厚い響きになるの ひとつ 0 メ 口 たのか だ。 デ 1 V 1 は ま を

フルートが、バッと三本に分かれた。

放りだされた。

私は、息を呑んだ。

いた。でも、私の耳には、先ほど聴いた音が焼きつくように残ってった。でも、私の耳には、先ほど聴いた音が焼きつくように残ってフルートの出番はすぐに終わり、弦楽器の連符だけが舞台上に残

きらびやか ような、 がれる。 弦楽器 やかに明滅を続けて、細かい音の連なり リーダーは、 が弾いていた激 生なりが ファー しい連符が、今度は木管セクショ 続 ストフルー 門戸さんの音はその トだ。不吉な運 ンに引 命の予兆 番 上 うき継っ で、

ンの演奏に、全力で耳を傾けていた。
もう、曲はあまり耳に入ってこなかった。私はフルートセクショに支えることで、彼女により鮮やかな輝きが与えられている。
が、より魅力的に輝いている。サードフルートが和音の底を重厚が、より魅力的に輝いている。サードフルートが和音の底を重厚が、より魅力がに輝いている。サードフルートが支えている。

大社さん ている。 は影のように寄り添い、上を吹く伸ばしの箇所。細かい連符が続く 門戸さんがどう演奏したいのか、 は知り尽くしているようだった。 箇所。 上を吹くふたりを伸び 、箇所。 どういう癖があるの 音程が高めに行くところ 大社さん 伸び せび 0 لح サー 羽ば K た ラル かか せ

味で並外れていた。さんの形に揃えている。彼がやってる芸当は、門戸さんとは違う意ではすっと自分も高めに寄り添う。細かい音の表情も、完璧に門戸

業 Bが に調整 はなく、 も音色もぴたりと合わせていた。 彼らも同じだ。みんな、 セカンドオーボエ。 嵐のように盛り上がっていた音楽は一転密やかなピアノとな 首席奏者のほんのちょっとした癖、 弦楽器やホルンと混ざるようにしているのだ。 (=首都交響楽団) セカンドクラリネット。 首席奏者が伸び伸 の艶やかな響きを生んでいる。 単に機械的に合わせ ずれている部 び セ と吹け ーカンド るよ ているわ -ファゴ 彼らの作 分を巧み ツ たけ 音

が終わりに近づいていた。り、静かな水のように流れ続ける。いつの間にか、第一楽章の

前

無音。フェルマータ。が終わりに近づいていた。

そして、オルガンが、鳴った。

完璧な音程でオクターブを奏でる。 ねられる。 ピ アニシモ の、 芦原さんがメンテナンス ラり。 それ が一 小節 続き、 $\widehat{\parallel}$ 中 略 点検) オクター L 7 - ブ上の 1 、る楽器 ラり が

セ うな安息の場面が描かれる。聖なる言葉を詠唱するような弦楽器と、 た激烈な第一 * 賛 美 歌 クションが、 、間と神とをつなぐように響くオルガン。 · (=神· 楽章・前半と対照的に、後半では神への捧げ 神聖な空気をまとってホ をたたえる曲) のようだった。 ールに満ちていた。 完璧に調和したふたつの 人 間 0 苦難 もののよ を 表

――すごい。

きた。 IJ か ストップを検 あと、 スト 響きを作 ツ 討 オルガンに触る機会はプ(=オルガンの部品 こってい オ るの ケと調和するようにぶっつけ本番で合わせて ンの部品)の組み合わせを変えたのは、神宮寺さんだ。リハーサルを終 なかった。 事前の研究をもとに ーサルを終えて

気持ちい

カルで、 にも、 楽は、 、楽器とオルガンの響きに、木管楽器が色を添えていく。 様々な音が積み重なっていく。 構築的 ルガンを作る工程そのもの 美しいもの もののようだった。幾重にも、幾重が次々と積み重なっていくような音 クラシ

は ギィのラヴェルには、なかった世界だ。

たら、オルガン曲を書く人と書かない人に、大きく分けられるの ラヴェルはオルガンの曲を書いたことがない。作曲家はもしかし カコ

この日の演奏のために、 神宮寺さんがどれ にほどの Ł 0) を 積み重ね

準備してきた神宮寺さんの姿を、その過程を、 に結実している。 私は、 一房のオルガンで執拗に練習をしていた日々が、 いていた。 ほんのわずか十分程度の出番に、 私はずっと見てきた。 い すべてを捧げて ま、 この

プが、 オルガンが、ミトの増三和音を鳴らす。 こまでも神聖な響き。指揮者が振り下ろすとともに、わずかに濁りのあるハーモニーを作る。(中略) 平均律に調整されたパイ

えた。 どこまでも 音楽は 消

ほうっと、 大勢のため息が会場を満たした。

ち誇った顔などしていないはずだ。 れているだろう。 た。神宮寺さんの表情は、こちらからでは見えない。でもきっと、 空気が一変していた。 ギィの見せた才気の残 響 は完全に消 彼の表情は、 音楽にだけ向 こと、勝いてい け

中

は再び、 大社さんに注目していた。

を支え、 ガート、 合奏に貢献 どんな音価になっても、 スタッカート、アレグロ、アダー し続けている。 単に黒子 大社さんはフルートセクション (=裏方) に徹してい ジョ、 どんな曲

> らの献身の上に、飛び抜けた天性を持つ首席奏者が躍動(=いきいま合湊にとって何が必要なのか、計算して音を出しているのだ。彼 るのではない。 全体を俯瞰 (=広い視野で見ること) しながら、

き している。

其がいいんだ。 鳥 肌 が

奏するものとは、また違う。 覚だと思った。その能力は、 ではそっと中間色を塗って、 首席奏者が飛び立つ場面では背中を押し、浮いてはいふと訪れた気づきに、鳥肌がびっしりと立った。 コンクールの舞台で輝かしい 周囲に溶け込ませる。 首席にはない感 け ソロ な 場

オルガンの整音だ。

こそできる、職人芸だ。 最適解を見出した。大社さんがいままさにやっている作業は、 私は、 たくさんの音を知って、 あの未成熟なパイプをどのようにすれ たくさんの引きだしを持ってい ば かを考えて、 るから 整音

私は、こんなフルートの 世 界 を知らな か 0 た。 1 ままでは、 気づ

くことすらできなかった。

オルガンが鳴った。 こういうフルート

なら

私

(逸木裕 "風を彩る怪物" 祥伝社より)

問 1 自然が、 を次から選び、記号で答えなさい。 描写から読み取れる「私」の思いとして最も適当なもの 1 、わずかに牙を剝いている感じがする」とありますが、「この二ヶ月間、私を包み込んでくれていた奥瀬見の「 問 5

ア ら違うらしい。 朋子には私と同じ気持ちでいてほしかったけれど、どうや

1 は大嫌いだ。 奥瀬見は安心できる場所だったけれど、 もうこんなところ

ウ 理解してくれると思っていたのに、 朋子にとって結局 私は

ェ 居心地のよかったこの場所でも、よそ者なのか。 まうのか。 うまくいかなくなってし

問 2 はどのような生き方を「朋子みたい」だと考えていますか。 解答らんに合うように三十字以上四十字以内で答えなさい。 -2「私は朋子みたいに、生きられない」とありますが、「私

3 味ですか。次の文の空らんにあてはまる言葉を本文から五 き出して答えなさい。 3 「私には、 私のフルートが、 ない」とはどのような意

間

分のフルートの演奏には

ということ。

4 体的に答えなさい。 念そう」だったのはなぜですか。 4 一残念そうに言った」とありますが、 四十字以上五十字以内で具 芦原さんが

問

~~A「道が閉ざされていく。見つけたと思っていた、 道が。」、B「嵐のように盛り上がっていた音楽」に使われて いる表現技法として、最も適当なものを次からそれぞれ選び、 私の

記号で答えなさい。 直喩 イ ウ 擬人法のほう

T

工 体言止め オ 倒ら対に 置ち句 法 法

6 V ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。 5 「自分の中に眠っていた。醜いもの」とはどのような思

問

ア 1 自分は芦原さんに利用されたにすぎないのではないかとい オルガン作りの才能があることを認めさせたいという本音。

う疑い。

ウ 嫌悪感。
だらだらとフルートを続け、 結果を出せていない自分への

工 朋子と芦原さんの仲を引き裂いてやろうというたくらみ。

問 7 選び、 a~dの言葉の意味として、 記号で答えなさい。 (dは6ページにあります。) 最も適当なものをそれぞれ

a 切り札

ア とっておきの決め手 1 意地悪なセリフ

ウ 知られざる秘

工 降参のしるし

b 生半可なまはんか な

中途半端なおろかな

工 1 自分勝手な 時的な

- С 踵を返して」
- 気持ちを押し殺して 1 立ち止
- 腹を立てて
- 工 反対に向 合かって

まらないで

- d 「空元気」
- 意地の張り過ぎ
- うわべだけの明るさ
- 単なる遊び
- 工 浅はかな考え
- 問 8 らんに合うように五字以上十字以内で答えなさい。 6 「私の未来」とは、どのような「未来」ですか。
- 問 9 で答えなさい。 の何を確かめようとしているのですか。十字以上二十字以内 ―7「値踏みするように」とありますが、芦原さんは「私
- 10 った」とありますが、 音は遠くなっていき、やがて、激しく吹く風の中に消えてい ―8「ふたりが遠ざかっていく。異なる音程のふたつの 最も適当なものを次から選び、 これはどのようなことを表しています 記号で答えなさい。 足

問

- ア ふたりとは目指しているものが違うことを「私」が自覚し、 ふたりから離れる決意を固めたことを表している。
- 1 芦原父子の足音は、 はなかったことを表している。 ふたりの歩んできた道が決して順調で
- ウ 遠ざかっていくふたりの足音は、朋子と芦原さんのこれか ら進む道が異なることを表している。
- 工 れたように感じていることを表している。 芦原父子との心の距離が遠くなり、「私」 がひとり取

11 |にあてはまる文として最も適当なものを次から選

問

- 記号で答えなさい
- ア 私も練習を重ね、感動させる演奏をしたいと思いました。
- イ 私には一生、あんな演奏はできないと思いました。
- 彼の演奏は、神宮寺さんにかなわないと思いました。自分が目指す音楽とは、なんか違っているなと思いました。
- 12 「大社さんの演奏」の特 徴 にあてはまるものとして、最も 10「〈大社さんの演奏を聴きなさい〉」とありますが、

問

- T 力を最大限に引き出すことができる。 首席奏者の癖にあわせた演奏をすることで、その人の魅適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- まるで、輝く光源のように伸びやかで耳に残る美しい音色
- ウ 正確な音程で機械的にリズムを刻むことによって、 で、全体の演奏を引き立てることができる。 全体
- 工 かれてきない。かれている。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。 の音楽の進行役を担うことができる。

とで完璧な音楽を作ることができる。

- 2 答えなさい。 文の空らんにあてはまる語句を本文から七字でぬき出して 芦原さんはなぜこのようなことを伝言したのですか。 次の
- 気づかせようとしたため。 大社さんの演奏と(が似ていることを「私」 に

13 ろが「失礼」なのですか。 号で答えなさい。 11「失礼なやつだなあ」とありますが、 最も適当なものを次から選び、 どのようなとこ 記

問

ア フルート奏者として素晴らしいソロ演奏をする人物なのに、

イ 「私」はセカンドやサー 「私」は名前も覚えていないところ。 ドフルート奏者にはなりたくない

ウ セカンドやサードフルート奏者については、 と思っているところ。 私 は名前 す

工 ファーストフルート奏者とセカンドやサー K ーフル 1 奏者

ら知らないところ。

の区別が「私」にはついていないところ。 12

問 14 字でぬき出して答えなさい。 外のたとえを使って説明した一文を本文から探し、 とありますが、このような演奏会の状況 「このあとのメインはおまけになってしまうレベル を、 最初の 音楽以 \mathcal{O} Ŧī.

間 15 もう一つたとえているものは何ですか。 13「立ちはだかる壁」とはパイプオルガンのことですが、 最も適当なものを次

ア

1 ギィに魅了されてしまった演奏者たち。

ウ 芦原さんのメンテナンスした楽器を弾く重圧。

工 自分の実力以上の難曲を演奏する緊 張

> 問 16 て最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。 14「私は、泣いていた」とありますが、「私」 の心

短

T い出番しかないオルガン奏者を気の毒に思っている。 神宮寺さんの演奏は素晴らしいが、どれほど努力し ても

イ んと比べて、自分の努力不足を痛感し後悔している。 勝てないと思っていたギィに負けない演奏をした神宮寺さ

ウ 神宮寺さんの演奏を初めて間近に聴いたことで、 実は素晴

工 さと、 弦楽器の演奏と調和する神宮寺さんのオルガンの素晴ららしい演奏家だったのだと気づき驚いている。 彼が積み重ねてきた努力を思い、 感動している。

問 17 五字以上十字以内で答えなさい。 「私にも」の後にはどのような言葉が続くと考えられますか。 15「こういうフルートなら、 私にも ―」とありますが、

問 18 以 ら二つ選び、記号で答えなさい。 本文における表現や描写の特徴として適当でないものを次か 降の本文のこと。) (後半とは5ページの 〈中略〉

7 合っていかざるを得なくなる様子が描かれている。 前半では、会話を重ねる中で、主人公が徐々に本心と向き

1 激しい言い合いをしている様子が描かれている。 前半では、 陽菜・幹・朋子の三人が、全員で感情的に なり、

ウ 移り変わりや雰囲気を読者に想像させようとしている。後半では、音楽用語を使って演奏会の様子を表現し、 曲

 \mathcal{O}

工 後半の演奏を聴いている場面では、音楽を聴きながら主人 公が気づいたことがつぶやくような言葉で表現されている。

オ 全編を通じて、様々な人物が音楽の魅力を語るのを聞い 主人公も自ら発信しようと成長するさまが描かれる。 . て